

甲州街道の歴史

甲州街道は、江戸時代のはじめに、徳川幕府が江戸から全国につながる道を整備した五街道の一つで、江戸から甲斐府中（甲府）を経て、信州諏訪をつなぐ大動脈の道路です。当初は「甲府海道」と呼ばれ、その後「甲州海道」、「甲州街道」と文字が訂正され、「甲州道中」という名称も一般化されていました。



花咲本陣(星野家住宅) (重要文化財)

江戸時代以前の大月・上野原市域

中世までの街道は、甲州街道とは大きくルートが異なっていました。上野原市域の街道は南側の四方津、梁川方面の桂川沿いを抜けて鳥沢に出ており、現在の国道20号に近いルートでした。また、大月から甲府盆地へ至る街道は、大鹿峠を通るルートが一般的でした。当時の笹子峠は「日陰の四寸道（四寸＝約12cm）」と呼ばれる、人馬がようやく通れる狭い道だったと言われています。

整備された甲州街道

甲州街道を通ると、内藤新宿から甲府までたどり着くに約3～4日かかりました。街道筋にはいくつもの宿場が設けられ、大月・上野原市域には十六宿が置かれました。いくつかの宿場には、旅籠はたごだけではなく本陣や脇本陣も置かれます。これらは参勤交代の際に大名一行が宿泊する宿であり、地方の名士の家が当てられた別格の存在でした。大月市下花咲にある星野家住宅⑤は、江戸時代の終わり頃に建てられた本陣です。人馬の継立を行う問屋を兼ねており、非常に重要な役割を持っていました。



⑤塚場一里塚

一里塚は、その名のとおり一里（約4km）ごとに街道の両脇に盛られた塚です。塚には標識のために木が植えられていました。この塚は旅の目安になるだけでなく、馬や籠の料金の目標にも使われており、街道の重要な設備でした。上野原市塚場⑤と恋塚⑫の一里塚は現在でも残っており、その姿を見ることができます。

鉄道（中央線）の建設とともに、甲州街道はその役割を終え、かつての盛況さは失われていきます。また、国道20号の開通により、甲州街道は旧甲州街道と呼ばれ、交通の流れは様変わりました。しかし、400年余の間に甲州街道が果たした役割は大きく、沿道には様々な文化遺産が残されています。